



世田谷文学館友の会

会 報 第 5 6 号

2019年12月12日
 世田谷文学館友の会
 〒157-0062
 世田谷区南島山1-10-10
 TEL 03-5374-9111
 FAX 03-5374-9120
 ホームページ
<http://setabuntomo.net/>

世田谷文学館・世田谷文学館友の会共催講演
 千葉俊二氏（講演）・中寛三氏（朗読）
 「人間・谷崎潤一郎——小説『春琴抄』」
 執筆時代の谷崎の動向と、その周辺——

堀 伸雄

拙宅に近い世田谷中央図書館の書棚に鮮やかな赤い装幀の「決定版 谷崎潤一郎全集」（中央公論新社）全二十六巻が整然と並び、谷崎文学の特異で官能的な雰囲気を感じ出している。今回の講演会は、近代日本文学とりわけ谷崎文学研究の第一人者で、この膨大な全集の編纂に携わられた千葉俊二氏（早稲田大学名誉教授）の講演に、俳優座（十六期生）中寛三氏による『春琴抄』の朗読を組み合わせ、立体的に谷崎潤一郎の世界に迫ろうという企画であった。

先ず千葉講師が登場。近年手がけられた仕事として、前記の編纂と合わせ、中央公論新社から上梓された『谷崎先生の書簡 ある出版社社長への手紙を読む』（二〇〇八）、『谷崎潤一郎の恋文』（二〇一五）、『父より娘へ 谷崎潤一郎書簡集』（二〇一八）の三冊を紹介。この三冊は、書簡の解明を通じて人間・谷崎潤一郎を追求めた力作である。千葉氏は、文学の研究はあくまでも人間に対する関心なのであり、その作家がどのような生き方をしたのかに目を向けるべきとの信念のもと、日記や書簡にこそ、その作家の生きざまが内包されているという持論を諄々と説かれた。谷崎

の書簡の相手は、中央公論社の元社長・嶋中雄作、『春琴抄』や『細雪』のモデルとなった松子、重子姉妹、そして最初の妻・千代との間の娘・鮎子であった。



熱心に語られる千葉俊二氏

2019年9月28日 文学サロンにて
 撮影・若宮利夫氏

千葉氏は、谷崎潤一郎の生涯を、特に『春琴抄』執筆の一九三三年（昭和八年）までの来歴にフォーカスを当て、「①幼少期の谷崎 ②文壇デビュー前後、③関東大震災後の谷崎 ④根津松子との出会い、⑤『春琴抄』前後」の流れで、『春琴抄』誕生の背景を概説された。

谷崎が幼少からその神童ぶりを見出され、やがて文壇にデビューするまでの過程には、三つの重要な出会いがあった。第一は、阪本尋常高等小学校時代の教師・稲葉清吉との出会い。担任として薫陶を受けたのみならず、卒業後は家計困窮により進学が危ぶまれる中で、東京府立第一中学校への道を開いてくれた。第二は、七歳にして授業で教師から読み

聞かされた村井弦斎著『近江聖人』との出会い。中江藤樹の少年時代を描いたこの書物に谷崎は強い感銘を受け、自ら購入して耽読。本気で聖人への道を志そうと考えた。第三は、東京帝国大学国文科に在学中、強度の神経衰弱の療養中に、当時新進気鋭の作家・永井荷風の『あめりか物語』に勇気づけられたことである。二四〇二五歳にかけて同人誌「新思潮」（第二次）や「スバル」に発表した初期の作品『刺青』『少年』等が荷風から激賞を受けたほか、森鷗外、上田敏等からも高く評価され、一躍文壇の寵児となる。

その後の谷崎の作家人生を決定づけたのが、関東大震災を挟む三回にわたる結婚遍歴と、震災を契機とする関西への移住である。最初の夫人・千代を巡る谷崎と詩人・佐藤春夫との紆余曲折の葛藤の末、千代は春夫と再婚。当時の世論を騒がせた所謂「細君譲渡事件」である。その途上で佐藤春夫は、「あはれ秋かぜよ情あらは傳へてよ……」と「秋刀魚の歌」に託して恋情の苦しみを吐露する。谷崎は第二の夫人として、古川丁未子（とみこ）を迎えるものの、二年で離婚。かねてから書簡のやりとり等で懇意であった大阪船場の豪商の妻、根津松子への思いを次第に深め、同棲、結婚へとつき進む。『盲目物語』『武州公秘話』『蘆刈』『春琴抄』は、正にその狭間で書かれたものである。谷崎は、それまでは作成したこともない創作ノートを『春琴抄』執筆の際にはじめて作り、松子への狂おしいま

での気持を創作ノートの形で残そうとした。ノートの題名も「松の木影」である。また、松子に宛てた書簡には、へ一生あなた様に御仕へ申すことが出来ましたらたとひそのために身を亡ぼしてもそれが私には無上の幸福でございます。（中略）私には崇拜する高貴の女性がなければ思ふやうに創作が出来ないのでございます」とある。

松子は春琴のモデルであり、さらには『細雪』四姉妹の二女・幸子へとつながっていく。谷崎を巡る人々との愛憎が、その作品群に通底する大きな要素となっている。



巧みな語り口で朗読される中 寛三氏 とバイオリン伴奏の西本徳子氏

撮影・若宮利夫氏

千葉氏の講演に続き、俳優座・中寛三氏による『春琴抄』の三十分間の朗読。氏の芸名の名付け親は、俳優座の重鎮で創設者の千田是也氏。本姓「中村」を千田氏が愛好する作家「中勘助」に因み、鶴の一声で改姓を勧められた由。バイオリン伴奏は西本徳

子氏、作曲は内藤正彦氏。物語の終盤、春琴は何者かに襲われ顔面に大火傷を負う。醜い相貌を見られたくないという春琴の心情を慮った佐助は自らの眼を針で突く。へお師匠様。私はめしになりました。もう一生涯お顔を見ることはござりませぬへ佐助、それは本当かへ春琴は佐助の真心を知る。春琴と佐助の心が師弟を超えて初めて通じ合う。佐助が己の内なる眼が開くのを感ずるこのクライマックスを、中氏は時には激情を吐露することく、時には繊細にささやくことく情感豊かに読まれた。西本氏のバイオリンが春琴と佐助の微妙な心の綾を絶妙なタイミングで奏でる。

終了後、会場から寄せられた三名の方の質問も今回の講演会の趣旨に沿った的確な質問で千葉氏、中氏はもとより、西本氏、内藤氏も回答に加わっていただいた。講演、朗読、質疑が渾然一体となり、無限の魅力を持つ谷崎文学の世界へいざなわれた秋の一日であった。（友の会会員）

エッセー「わたしの一冊」の原稿募集中！

- ・タイトルに本の題名（著者名・出版社名・出版年も）明記
- ・あなたのお名前、連絡先を明記
- ・字数は六〇〇字以内（厳守）
- ・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- ・原稿はお返ししません
- ・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- ・原稿は友の会に郵送かFAXでお送りください
- ・掲載は一人一回

わたしの一冊 『郵便配達は二度 ベルを鳴らす』

J. M. ケイン 著
光文社古典新訳文庫
藤野 覓

金持ちの亭主とハリウッド端役失格の女将の食堂に転がり込んだ。

半端仕事は小器用にやる「俺」は成行き任せ、女将コーラの魅力に惹かれるまま、手際の悪い犯罪計画に、やや積極的に巻き込まれる。しくじっても性懲りもなく「二度ベルを鳴らす」。

非情の地方検事、辣腕の弁護士、駆け引きが仕事の保険会社調査員などに良いようにあしらわれ、二度の裁判の末、すべてを失い処刑を待つ身となった。どうせカリフォルニアには、手ぶらで来たので、元々か。元々でないことに「俺」もやっと気が付く。神父が入って来た。執行の延期は無い。

作者J・M・ケインは一世紀前のロスト・ジェネレーションの一人。高校生の私が、飯島正のこの本の初訳を読んだのは、半世紀余の昔。その後、七、八冊の邦訳が近年まで出版、その度に一冊を求めて読んでいた。ノーベル賞作品といわれる『怒りの葡萄』もかくも数多く新訳されていないのでは。

訳者、訳文が変わり、読み手にも、社会にも変化がある。『郵便配達二度ベルを鳴らす』には、新訳を読むたびに、少年の日のように一冊の書を開く期待があり、新しい発見がある。（友の会会員）

一九三四年、大不況の最

中のカリフォルニア、「俺」はタダ乗りのトラックから放り出される。住所不定、定職無し、のホーボー、街道沿いの食堂で飲み食い、の挙句、「ツケにしてくれ」。な

んとか、ギリシャ移民で小

「偶然の世田谷区民」 たかはしけいすけ

いまから思うと、「こちらの都合も聞かずに、よくもまあ」と思うのだが、ぼくの上京とほぼ同時に、友人が勝手に公団住宅に応募してくれていた。運よくそれが当たって、上京三ヶ月後に京王線芦花公園駅近くの公団住宅に引越しをした。そこは杉並区との境界線ぎりぎりの場所で、ぼくは自分が意図しない経緯で、偶然世田谷区民になった。

公団、いまはURの芦花公園住宅は、二〇〇〇年頃に取り壊されてきれいになったが、ぼくが暮らした取り壊し前の建物は当時すでに充分古く、女友達が立ち入るのを躊躇するような佇まいだった。単身者用なのでトイレは共同、お風呂なし。キッチンとはいえない小さな流し台がついた1Kで、エレベーターなしの最上階の五階から、少なくとも日に二回、出勤と銭湯で階段を昇り降りした。

その日は銭湯で湯上がりにひと息つきながら、脱衣場に貼られたポスターを眺めていた。

「第四回文芸せたがや 作品募集」。

商業文芸誌に詩を投稿して選ばれたこともあったけれど、当時は落選続きで自信をなくしていた。よほど熱心に見ていたのだろう、

「応募してみれば」

と番台から女将さんに声をかけられた。女将さんは、ぼくの心境を知っていたわけではない。

半年後、ぼくは「文芸せたがや」詩部門の一席に入選した。

たぶん一席というのは、入選の下の選外佳作みた

いなもので、それを一席、二席などと呼ぶのだろうと思っていた。賞金が出るので贈呈式には印鑑を持参するようにとのことだったが、「ぼくには二千円ぐらいくれるのかな。図書券かもしれないから期待しないでお願い」などと思っていた。

気楽な気持ちで会場に着くと、一席は一番いい賞で、賞金はけっこうな金額だと知った。たちまち恐縮し、神妙な面持ちで会場に入った。

その後、受賞作品名をタイトルにして、第一詩集を出版した。選考委員だった詩人の江間章子先生に詩集をお送りすると、「今度こういう会を始めるから、あなたも入りなさい」と誘われた。それは江間先生と作曲家の芥川也寸志先生が発起人の「せたがや歌の広場」で、世田谷ゆかりの詩人と作曲家で世田谷生まれの新しい歌を作るというものだった。著名な詩人と作曲家が名を連ね、僕には分不相応な会に感じられた。この会でぼくは、得がたい知遇と、音楽のために詩を書くことを学ぶことになるのだが、それについてはまた別に書く機会があればと思う。

世田谷には、二〇一三年まで二十八年暮らした。生涯のほぼ半分で、最も長く暮らした街である。また戻りたいと思っている。

もし友人が、公団住宅に応募していなかったらどうなっていただろうか。それはそれで何らかの自分がいただろうが、その方がよかったとは思えない。

文章を書くことで何者かになりたかった自分を、世田谷が育ててくれたと感じるところは大きい。その感謝が、世田谷への愛着になっている。(詩人)

執筆者紹介 詩集「なんとかして」。絵本の翻訳、歌曲の作詩など。「せたがや歌の広場」世話人。八王子市在住。

ヨソの文学館・記念館

【高志の国文学館】

この夏、標高二四五〇メートルの富山県室堂で万葉歌人・大伴家持の歌に出会った——「立山(たちやま)に降り置ける雪を 常夏に見れども飽かず 神(かむ)からならし」。立山自然保護センターのハイビジョン映像に富山湾の雨晴海岸から望む立山連峰が映し出され、この歌が白字で浮かび上がった。雷鳥や高山植物に出会えればよかったはずが、越中国守に赴任し立山を息を呑んで眺めた家持に思いを馳せた。三千メートル級の山々を神々しいというにはあまりにも間近で見ている私は罰当たりか、あるいは神の近くにきたのか、山の冷気が肌へ迫ってくるようであった。

立山の余韻を残して「高志の国文学館」へ向かう。富山駅から市電で二つ目「県庁前」から五分程で蔵と蔵の壁面を潜るように北側エントランスに着く。二〇一二年に開館し、地場産業のアルミを使って鋳込んだという外壁や旧知事公館の広い庭園を生かした花々が話題であったが、今年には新元号が「令和」と決まり、提案者の同館館長・中西進氏は一躍時の人となった。館内は堀田善衛をはじめ富山ゆかりの作家や先人たちを「ふるさと文学万華鏡」や「万葉とばし」のしかけなどでアピール。先進の展示手法に驚く。今秋は特別展「藤子不二雄展」の変コレクションを開催。越の国の高い志を共有し、広く文化の一環として文学を捉えている文学館である。

住所 富山市舟橋南町二二二

電話 〇七六―四三二―五四九二

入館料 二〇〇円

休館日 火曜日、祝日の翌日、年末年始

(友の会会員 幾田充代)

平成納めの散歩

萩原朔太郎、森茉莉と共に

橋本 里子

戦争無き平成最後の朝は雨に始まった。スタッフの皆様、会員各位の熱意の賜か、幸いに雨も止み、総勢三十六名平成納めの散歩は無事開催された。きむらけん先生が話をされた瞬間から、先生のあふれる熱意に動かされる。文学者が憑依したかのような熱い散歩となる。生前退位で時代が変わる正にその日。日の丸も揚げられる歴史的な日を歩く。

詩人の濃度の高い町下北沢ということで、小説家、詩人、俳人、綺羅星のような名が次々お話に上がる。興味もずんずん上がる。

萩原朔太郎が朝、人目を避けて影のように裏口から出、煙草屋で敷島を買う。懐から葉書、手紙を出しポストへ。裏道をさ迷い、路地を抜け坂を上り下り、屋敷町まで上る。屋敷町には秘密がたくさんある、とのお話。ぜひ詳しくお聞きたい！迷えば空を見上げ、鉄塔を探す。代田の丘六十一鉄塔。風景資産とのこと。作家たちは歩きながら考える。屈折、闇を胸に抱え、常人には見えぬ物を見る。それを左見右見し、深め発酵させ、また考える。そして作品が生まれる。

五本のヒマラヤ杉跡を眺めながらの休憩の小公園では、中村草田男の「万緑の中や吾子の歯生え初むる」の句に思いを馳せる。その時、平成を送るのかのように桜吹雪が美しく舞う。

そして森茉莉が常連であった「邪宗門」での昼食。森茉莉その人を知る門主・作道氏、お嫁さんの熱心なお話を伺いながら、森茉莉弁当を頂く。



平成と令和を跨ぎ、4月30日「平成納めの散歩」(右)、5月1日「令和始めの散歩」(左)を実施、友の会の皆さんと共に時代の境目をしっかりと踏み締めた。両日とも一本松公園で朔太郎の『猫町』を群読、皆さんの声が空に響いた。

撮影・堀伸雄氏、幾田充代氏

作家の旧宅、文学碑などを教えて頂きながら散歩は続く。

森茉莉が西洋乞食のような身ごしらえで、簾か布か、買物籠を下げ、駅前市場へ一日一枚のイングランドチョコレートを買いに歩いた道を行く。以前渋谷の雑踏の中、遠い目をして歩く武満徹を見た。森茉莉も同じように、違う空気を纏って歩いていたことだろう。

そして解散の時、急に雨。平成を雨が締める。

独自の世界を醸す濃密な文学世界に浸りたい。少しの瑕瑾、弛みも許さぬ時代が、令和では、非凡な才能、異種異形を認める柔らかな時代に変わりますよう。
(友の会会員)

講座「羽衣伝説を楽しむ」を聴講して

人見 やすこ

当日は台風が来そうで来ない蒸し暑い日。天女が羽衣を脱ぎ水浴びしたら気持ちよさそうという天候だった。

平出泷氏のお話は、含蓄に富み、伝説の世界も一筋縄ではいかないものだと考えさせられました。

謡曲『羽衣』では、漁夫白竜が三保の松原の松にかかった羽衣を盗み取る。返し賜えと涙する天人の五衰を見て、白竜は「おんいたはしく」思い、天人の舞楽を奏するのと引き換えに羽衣を返す。

地謡にある「簾(しょう)、笛、琴、篋篋(くぐ)、弧雲の外に充ち満ちて」という言葉に、思い出すことがあった。平等院鳳凰堂の『木造雲中供養菩薩』だ。長押上の壁に小さな菩薩達が、たなびく雲に乗り遊泳している。その姿態は天女と見紛うばかりだ。

全部で五十二体。その内二十七体が楽器を奏でている。この謡曲に出てくる鳴り物以外に、鼓、均子（きんす）と撥（ばち）、シンバル、琵琶、拍板（はくばん）等々。平安時代に、こんなに多種多様な楽器があったのかと驚いたものだ。

羽衣伝説は日本各地にあり、百三十話を超えるというところ。天女が水浴びをし、村人が羽衣を盗み取ってしまう、という出だしの部分はいずれも同じ。その後の展開が分かれる。すぐ天に帰れない話の方が多くという。泣く泣く村人の妻になり、子を産み、人間世界に引きずり込まれる。天女の優雅なイメージから遠ざかり、泥臭い生活に巻き込まれてしまう。

天女は羽衣がないと「飛行の道も絶え、天上に帰らんことも叶うまじ」なのである。かぐや姫のように天から車で連れ戻しには来てくれない。「奉仕を定め役をなす。我も数ある天乙女」とあるように、天女は、どうも平民のようだ。だからお迎えは来ない。よく考えると、気の毒な役回りだ。

色々な伝説を教えていただいたが、私としては、謡曲の姿を自分に留めておきたい。「天の羽衣、浦風にたなびきたなびく、天つ御空の霞にまぎれて。失せにけり」という優美な姿を。

謡曲を竹内修司氏が鍛錬した声で謡ってくださり、能舞台を想い描きつつ講座を聴くことができました。羽衣伝説を楽しませていただき有難うございます。

（六月二十八日・世田谷文学館にて）

（友の会会員）

講演 澤地久枝氏

「石牟礼道子・『かなしみ』の表現」を聴いて
峰村 澄子

私は、澤地さんの『妻たちの二・二六事件』を発売当時に読み、歴史を考えさせられた。その澤地さんが、石牟礼さんとうとう知り合い、交流されたのか、お話が楽しみであった。

石牟礼さんは一九六九年に『苦海浄土―わが水俣病―』を出版。一九七〇～七一年に水俣病患者達がチツソ本社に座り込みをした時にも共に戦っておられた。私自身も高校時代から公害に憤りを感じ、座り込みの末端に居た。



懐かしみ、深く思いを語る 澤地 久枝氏

2019年5月24日 文学館にて
撮影・幾田充代氏

澤地さんは『苦海浄土』を読み、雑誌に石牟礼さんを書きたいと思い、一九七六年、熊本駅で石牟礼さんと待ち合わせ。胎児性水俣病の上村智子さんの家に案内され、澤地さんが「水俣を見に来た」という意味の事を言うと石牟礼さんが「智子ちゃんに会いに来ている」と取り成してくれた。消すことの出来ない恥だと話された。浜辺の古代椿も海も美しい

が、海は汚染されている。石牟礼さんと塩田カメラマンが、水俣で貝を取って来て食べたので澤地さんはギョツとしたら「二つ三つ食べたからといって水俣病にはならない」と言われたとか。私が智子さんに会った時はスイカを頂いたが、スイカを食べても水俣病になるのでは？と思う程、水銀中毒の痛ましい姿であった。

石牟礼さんの文は独特で、薩摩と天草のミックス方言で石牟礼節とも言えるべき言葉とのこと。また、本質的に詩人であるとも澤地さんは語る。私にとつては歌うような、そして妖しげな表現が読んでいて難しかった。

石牟礼さんの精神は強くて逞しい人、しかし、ある雑誌の原稿「渚にて」を読んでも伝わってくるのは心の底にあるかなしみ。このかなしみが文学にまで昇華したと話された。

石牟礼さんは「人はどんな絶望的な状況に入っても希望を失わないと発見した」と言っていたが、力を尽くしきれなかった虚しさを感じていたと思うとのこと。最後まで天草の乱を書くつもりでかなり調べた話された。石牟礼さんの誕生日である3・11に起きた東日本大震災をきっかけに生まれた新作能「沖宮」（原案・原作 石牟礼）。私は京都で観ることができた。天草四郎と少女の哀しみと希望が、志村ふくみさんの衣装でさらに美しい物語となり、素晴らしかった。是非、多くの方に観ていただきたい。澤地さんは石牟礼さん同様、かなしみを心の底に抱いていても頑張つて明るい方に向かって生きたいと話された。敬服である。

（友の会会員）

講座「金子文子『何が私をこうさせたか』を読む」 に参加して

平澤 マチ子

「金子文子」恥ずかしながら、まったく知りませんでした。『若い女性が獄中で自死』の講座紹介文が気になり、受講しました。

講座は令和元年七月十日、梅雨の晴れ間。芦花公園駅から、なだらかな坂を下り緑深い文学館へ。

講師は、安元隆子氏（日本大学教授）。美声で「私は文学研究で思想研究ではありません」と、強調された。

安元氏は事前に参考図書『何が私をこうさせたか——獄中手記』（岩波文庫、二〇一七年十二月）を読んで一緒に探究しましょう、と呼びかけられた。

獄中手記は死刑を前に判事から「過去の経歴について何か書いてみせろ」と言われ徹底的に自己を見つめた手記である。硬質な裁判記録にはない文子の汚点、弱点が記されている。

安元氏は参考図書を読んでいない人にもわかる資料を用意してくださり、その資料といくつかの映像を交えて講座は始まった。

無籍という特殊な上に複雑で恵まれない環境に育ち、日本人でありながら朝鮮の独立と日本帝国主義（天皇制批判等）への抵抗を貫いた強い女性、思想家、同志朴烈（パク・ヨル）の夫人として自死した文子。でも、情緒や性に流され引きずられる弱さもあった文子。

その時代は韓国を併合（一九一〇年）した日露戦争。その後、日本もアジアにあるドイツの植民地で戦った第一次世界大戦、そして国内では関東大震災

と、足元もぐらつき現代以上に不安定で未来が描けない時代ではなかったか。

蛇足ですが、私の好きな夭折の詩人「金子みすゞ」と文子は同じ一九〇三年生まれでした。ふたりがこの令和時代に生きていたら、また私がその時代に暮らしていたらと想いを馳せる。

文子の墓は韓国聞慶『朴烈義士・夫人金子文子女史記念館』にある。朴は恩赦、減刑、病気等により七十二歳北朝鮮で死亡。波乱の文子だが『朴とともに死ねるならば満足しよう』の希望通り満足しているでしょう。今、こじれている日韓問題がほどこたら聞慶を訪れてみたい。

（友の会会員）

わたしの一冊
『シカゴよりこわい町』
リチャード・ペック 著
東京創元社 刊
坂田 美代子



子供の本である。であるのだけれど、どこの図書館で探しても、一般書の棚にある。ニューベリー賞というアメリカの権威ある児童文学の賞を受賞しているの、少なくともアメリカでは子供の本のカテゴリーなのであろう。

時代はギャングの跋扈するアル・カポネの「シカゴ」ではなく、はるばるイリノイ州の田舎町である。

毎年夏休みの一週間、田舎の祖母に預けられたシカゴの都会育ちの九歳と七歳の兄妹の話というと、何かノスタルジックな心温まるとか想像してしまいそうになるけれど、とんでもない。

大柄で、働き者で、うそつきで型破りな性格、そんな祖母にブンブン振り回されて、それでも貴重な経験を夏ごとに積み重ねていくことになる。例えば、ギャングの抗争で有名なシカゴではなく、この町で初めて死体を見ることになる。初めて飛行機に乗り、初めて車を運転する。それも祖母のおかげで。

悪口を言いながらも、正義感が強く常に弱者の味方である祖母のとてもでもない行動に動かされて、大都市のシカゴでは経験できない人間としての大切なことを学んでいく。

こうして書くとはやはり、ありきたりの成長物語のように聞こえるけれど違う。

町のろくでなしを偉人に見立てて立派な葬式を出してやり、盗んだボートで違法のナマズ釣りをし、それを料理して恐慌で職を求めて移動する放浪者たちにふるまったりする。ピストルをぶっ放し、弱い老人に質の悪いいたずらをする不良少年たちに、ネズミ入りの牛乳や手作りの膠できついおしおきをしたりするのだ。

「草競馬」の歌の似合う大恐慌時代のイリノイの田舎で、破天荒なおばあちゃんと過ごすスリル満点な夏の思い出は、やはりおとなの本と言えるかもしれないし、おとなに是非とも読んでもらいたい本である。

（友の会会員）



「世田谷区民ではないけれど……」

「雲のゆくえは、我孫子そして世田谷」

平林 清江

我孫子市白樺文学館の前身、私立白樺文学館のスタッフの頃、世田谷とつながる二つの出会いがあった。

まずは、世田谷文学館友の会会長の平出洗先生との出会いである。平成十八年一月に「来館、『スバル』のお話を伺ったが、頂いたお名刺には「平出修研究会主宰」とあった。我孫子に霏々と雪の降る日の忘れ難い出会いである。最近、先生のお導きで友の会の講座・散歩に我孫子から足繁く参加、大いに文学的刺激を受けている。

もう一つは、我孫子に住み、後世田谷に移住した画家で歌人の原田京平と、その作品・資料及び継承者との出会いである。日本美術院出身の原田京平は、雑誌『白樺』の強い影響を受け、大正期、白樺同人の柳宗悦・志賀直哉・武者小路実篤が住む我孫子町に移住、彼らと親密な交際を果たした。志賀が京都に転居後は、その留守邸に住みながら、我孫子の自然を題材に多くの油彩画を描いた。

また、窪田空穂を師とする歌人でもあった京平は、空穂系短歌雑誌『槻の木』・『地上』・『白樺』同人たちとの交友も盛んに行い、我孫子にて充実の六年半を過ごした。

やがて、昭和三年三月、家族を伴い世田谷若林に転居、さらに同五年三月には世田谷五丁目に画室を建てて移り、ここが終焉の地となった。

京平の我孫子生活や交友及び芸術活動について

は、かなり解明され、現在「我孫子・白樺派を継ぐ者」として認知され、その評価も定まりつつあるが、世田谷の頃のそれについては未だ明確ではない。

京平は昭和十一年一月、病故に満四十歳で早世したが、妻により遺歌集『雲の流れ』が刊行され、筆名は原田和周、序文は窪田空穂による。「世田谷の青い空に白い雲の流れる」のを見ては、旅への想いを募らせていた京平を偲び、妻はこの歌集を『雲の流れ』とつけたのである。

世田谷の頃、京平は何を思い画布に向かったのだろうか？ いつの日か、画室のあった場所を探し訪ね、世田谷の頃の京平を知る第一歩としたいと考えている。

手がかりは、遺歌集奥付にある住所、「東京市世田ヶ谷世田ヶ谷五ノ二八四九」とのみで、心細いばかりだが、区民の皆様のご教示を切に願っている。

(友の会会員)

せたぶん・うおっちゃんぐ



小松左京著 『日本沈没』 小学館文庫刊

鈴木 美奈子

「SFとは希望である」というメッセージが伝わってくるが、これこそ『日本沈没』を書いた動機であった。十四歳で敗戦を迎えた著者が、一億玉碎という戦中のスローガンに、これは何？ 本当に日本国民はみんな死んでいいと思っていたのか？ 日本という国がなくなっていくと思っていたのか？ だったら一度やってみたらどうだ？

国を消すことで、日本人とは何か、日本文化とは

何か、そもそも民族とは？ 国家とは？ と考えさせ、その思いから十八歳の小松青年は京大時代に共産青年同盟に加盟する。『地には平和を』を小松左京名で第一回空想科学コンテスト（早川書房）努力賞を受賞、戦争への深い関心は彼の生涯付きまとい続けたモチーフでありテーマであった。



1973年刊

『日本沈没』の導入は、東京駅で主人公が水を飲むもうとした時、後ろの壁に細い亀裂を見つけることにはじまる。そして太平洋航行中に島の南東、小笠原の先の北の島一つが一晚で消えてしまったことが次の導入。太平洋海底を走る富士火山帯の真上を航行しているときであった。日本中央部から南方に向う太平洋海底、一六〇一七〇〇キロに伸びる火の帯。赤道より太平洋最北端の陸地、微細な飛び石を形づくる島々、これらは巨大な海底山脈の上に乗っている。長大な褶曲構造の上だ。そして太平洋海底、七九〇〇米の海底に日本海溝……、そこに何が起っているか。日本列島全体は毎年一センチ以上のスピードで南東方へ移動するほどの圧力を日本海側から受けている。もし太平洋でこの圧力を支えている力の圧が急に減少したら……！ 最悪の場合、日本列島の大部分は海面下に沈む！

ええっ！ SFが希望であることを思い出そう……。

(友の会会員)

～こういう催しがありました～（２０１９年４月～２０１９年９月）

【講演・講座】

（企画委員会）

月 日	講演・講座名	講 師	内 容
2019 年 5 月 24 日	講演 石牟礼道子・“かなしみ” の表現	澤地 久枝氏	1976年に熊本駅で石牟礼さんに出会い、『苦海浄土』の舞台となった地と胎児性水俣病患者の上村智子さん宅を案内された際の印象を基に石牟礼文学の底流にある“かなしみ”について伺った。石牟礼さんが『苦海浄土』執筆後も語った「私は人間のかなしみという主題から離れられない」との言葉が重い。
6 月 28 日	講座 羽衣伝説を楽しむ	平出 洸氏 謡曲 竹内修司氏	謡曲「羽衣」の原文を味わいながら、曲の数カ所を長年、観世流謡曲に親しんでこられた竹内修司氏（友の会前会長）に謡っていただいた。後半は、奈良時代に編纂された近江国、丹後国等各地の「風土記」の中に描かれた天人伝説を辿った。
7 月 10 日	講座 金子文子 『何が私をこうさせたか』 を読む	安元 隆子氏	関東大震災の際、朴烈（パク・ヨル）とともに拘束され、やがて大逆罪の嫌疑で死刑判決を受ける金子文子が獄中で残した自伝を読み解く。無籍者として過酷な幼少期を過ごした一人の少女が、苦難の果てに、朴烈への愛を貫きながらあらゆる権力を否定する虚無主義者に至る精神遍歴と人物像を、映像を交え解説。
9 月 28 日	講演 人間・谷崎潤一郎 —小説『春琴抄』執筆時代の 谷崎の動向と、その周辺— （文学館と共催）	千葉 俊二氏 朗読 中 寛三氏 バイオリン演奏 西本 徳子氏	日本近代文学史上、常に文壇の第一線で豊饒な香りを放つ作品を発表し続けた谷崎潤一郎の人物像を、『春琴抄』が世に出るまでの過程に焦点をあてて解説。後半30分は、『春琴抄』の一節を俳優座・中寛三氏に、西本徳子氏によるバイオリン伴奏付きで朗読いただき、谷崎文学の世界を満喫した。

【散歩】

月 日	散 歩 名	案 内	内 容
2019 年 4 月 30 日 5 月 1 日	平成納めの散歩（4 月 30 日） と令和始めの散歩（5 月 1 日） 世田谷を愛して恋して生きてきた人 — 萩原朔太郎、森茉莉、三好達治らの暮らした北沢～代田～せせらぎの北沢川緑道を巡る （両日とも同一コース）	きむらけん氏 （作家、北沢川文化遺産保存の会主幹）	新元号「令和」への節目を機に、再度世田谷の魅力の詰まった代田界隈を、この地を知り尽くしたきむらけん氏による案内により、萩原朔太郎の『猫町』の雰囲気漂う路地や緑道を辿り、文人たち縁の場所を巡った。森茉莉が常連客だった代田の「喫茶 邪宗門」での信濃屋の弁当と門主・作道明氏の心尽くしのおもてなしも印象に残った。

編集後記

今年は集中的に幸田露伴の作品を読む機会を得た。明治三十年代の作品では、辞書を片手にではあったが、存外読み易く、その作品世界の持っている豊かさに充分浸ることができた。

また、森鷗外作品を精読していた折、「小さな」というありふれた一語が、まるで水晶が光を放つように、その言葉の意味する世界が、深く広く作品全

体を照射するのに驚いたことがある。このような経験は文学作品ならではないだろうか。

昨今の学習指導要領の大改定で、高校の国語教育が大きく変わろうとしている。国語教育の中の「文学」を狭めていく傾向に、私は強い危惧を感じる。

（森 ゆり子）